

千葉県高等学校教育研究会地理部会 編
『新しい地理の授業—高校「地理」新時代に向けた提案—』

國原 幸一朗*

本書は歴史や公民の教員、地理専門の若い教員を読者と想定している。執筆者にはベテラン教員と若手教員がいて、所属校も公立と私立、進学校から課題を多く抱えた学校まで多岐にわたっている。「よそ行き」でない「普段着」の授業を紹介しているところに惹かれた。これまで「培ってきた成果を共有して有効活用したい」という思いに共感し、ぜひわが地域でも実践成果を発信・刊行しようという動きが進み、都道府県を越えて交流が活発になると「地理総合」の未来は明るい。「地理総合」の設置により、地理に関わる教員は確実に増加する。地理を自分のものとし自分の専門領域でも活用できるようにするには、他教員の実践事例が必要である。本研究会は、近年実施される「地理総合」の実践につなげようと、これまでの授業実践をまとめ、このタイミングで書籍として発行した。これまで地理の授業実践をまとめた書籍は歴史に比べると少なく、本書は待望の書といえよう。3章5節より構成され、29名の高校教員により執筆されている。

はじめに

第1章 地図や地理情報システムで捉える現代世界

第2章 国際理解と国際協力

第1節 生活文化の多様性と国際理解

第2節 地球的課題と国際協力

第3章 持続可能な地域づくりと私たち

第1節 自然災害と防災

第2節 生活圏の調査と地域の展望

第1章では、まず身近なデータを用いた地図表示や授業内のできるミニ巡検の取組(石毛一郎)を示し、授業の導入や展開における地図や地球儀を用いた学習活動のヒントを与えてくれている。次に地理専門の教員でも避けがちな空間分析、とくにバッファとボロノイ分析を分かりやすく解説し、紙上で学習が展開できる事例(小林岳人)を示している。それに対してパソコンのGISフリーソフトであるMANDARAの基本操作で様々な主題図が描ける楽しさを感じながら学習を深められる事例(鈴木佐知)も示されている。他にシミュレーション教材を用いて、交通を多面的・多角的にとらえる学習(太田貴之)も紹介されている。交通

インパクトを専門とする評者は、本授業で社会変容をどのような側面から明らかにしたのかを知りたいと感じた。

第2章第1節では、まず大気大循環の授業(藤田晋)で身近な話題や実例を積み上げながらストーリーを描いていくことで大気大循環を理解しやすくなるとともに、歴史との融合による単元設計の必要性を指摘している。これまで自然環境の学習では地学的な内容に深入りしないとされてきたが、挑戦的な試みである。ただ限られた学習時間と生徒の実態をふまえ、ストーリーの深さを見極める必要がある。次のケッペンの気候区分の学習は、一般に淡々と講義形式で進められがちであるが、本授業(小林一雄)では生徒にどのような方法で規則性を気づかせようとしているかに着目している。また電話番号と郵便番号、地球温暖化と航空機の学習(土屋晴彦)は、評者なら地域区分や航空交通を貿易と結びつけるが、本実践では情報や交通を環境問題と結びつけ、学習展開がユニークである。この他、多国籍企業についての調べ・発表学習(黒川仁紀)では、生徒がどのような観点から発表しているかに着目したい。アニメーションを用いた学習(小林啓三)では生徒の多様な意見を示しながら知的好奇心を揺さぶる効果があったと示されているが、評者もとくに歴史の授業で映像を視聴させることがある。しかし学習者の関心がストーリーに向き、自然環境や衣食住などシーンを十分にとらえさせられないことがよくあった。生徒の否定的な意見から、インターネットより入手できる画像や動画を利用し、対比させながら理解を深める方法もあろう。さらに言語と宗教に関する学習(鳩川文也)では、生徒の生活の中の知識として定着させることを意識し、共同学習で地図をもっと活用できると述べられている。

第2章第2節では、まず人口統計を図表化して地域を位置づけるとともに、地域課題を見つけ、持続可能な地域づくりへと接続する学習(後藤泰彦)が示されている。次に食料問題の学習(廣嶋伸道)でマインドマップを用いペアワークで話し合い内容をまとめている。水資源問題についての学習(小西薫)では、飲料水とバーチャルウォーターについて様々な手法を用いることにより、生徒の授業に取り組む姿が変わったと

*名古屋学院大学

述べ、民族問題（宮嶋祐一）、北方領土についての討議（萩原利幸）、南北問題（松村智明）でもグループワークの有効性が示されている。身近な事例から都市問題を捉える学習（上野剛史）では、同様の問題が日本や世界の各地で起こっているとつなげることができれば、地理的見方・考え方を養うことになる旨を指摘している。

第3章第1節では、世界の災害と防災についての学習（安藤清）で、日本や地域の防災の学習とのつながりの重要性を述べ、ハザードマップを活用した授業（堀江克浩）では生徒がより現実的に考察し検証できた一方でクロスロードには課題があることが示された。また防災科学技術研究所のウェブページにある「Hi-net 自動処理震源マップ」とハザードマップを用いた学習（飯塚薫）では、生徒と災害の間に心の距離ができないよう、実感の伴った授業を他教科・教育活動とともに連携・役割分担して行う必要性を指摘している。

第3章第2節の新旧地形図から学校周辺の変遷を探る学習（泉貴久）では、考察力から構想力の育成に向けての授業展開が示されている。また社会的課題の解決を考える学習（山本晴久）では地域の方を招いたり、訪問して話をうかがったり、コンセンサス会議の手法を用いた社会参画を授業に取り込んだ事例も示されている。この他、生徒の通学ルートを活用した調査の実践（関研一）や様々な赴任校におけるフィールドワークの実践（関信夫）について述べ、地図を使い統計などの資料から考察できる力を養うことは生きる力や生活力をつけることにつながると教育的意味にまで踏み込んだ指摘もある。

以上、評者の私見を交えて各章の概要を述べたが、「地理総合」の趣旨に基づき、本書全般について特筆すべき点をあげておきたい。新設された「地理総合」の

内容の柱は①地図と地理情報、②国際理解と国際協力、③持続可能な地域づくりである。①については読図と目的に応じた主題図作成の技能が求められ、その手段としてインターネット上の統計を用いて図表を作成し、GISを利用する。あくまで地図と地理情報をどう利用するかという地理の原点を「地理総合」担当者で共有する必要がある。近年はややGISに偏りすぎている。本書はこれまでの本県の取り組みを踏まえ、バランスのとれた構成である。②については言語・宗教と自然環境の内容で多様性、産業の内容で変容が軸となっている。各学習はSDGsと関連づけられる。国際協力の在り方は食料・水・南北問題の学習でふれられるであろう。本書では、様々な学習手法が紹介されている。③については小学校から高校まで取り扱う災害・防災学習を各学校種でどう役割分担するかが課題となるが、高校では世界的スケールで日本や身近な地域を関連づけることとなり、本書にも示されている。地域調査は現実を見据えた社会づくりを構想するための手段で、本書では思考力から構想力育成への授業づくりが提案されている。

本書は、千葉県高等学校教育研究会地理部会の設立70周年記念事業の一環として発刊されたが、これまでの地理の授業を振り返り、どのような実践や研究を蓄積していくかを考えるきっかけを与えてくれる。図表が多く掲載されているが、ワークシートや生徒の表現、コラム記事などもあり、学校の様子が手に取るように伝わってくる。地理をどのような切り口でアプローチすればよいかとと思っている方、公民や歴史が専門の方だけでなく、実は地理が専門で他の人に聞くに聞けない方にも手にとって読んでいただきたい。

（二宮書店、2019年11月刊、222頁、2,500円＋税）